広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第55号　2006　19－24

日常的会話場面における発話者に対する共感度と批判的思考の関係

― 会話文を用いての検討 ―

沖　林　洋　平

（2006年10月５日受理）

Relationship between sympathy and critical thinking in the daily conversation.
Investigation applied the text of conversation

Yohei Oibayashi

The relationship subjects' sympathy for the speakers and the behaviors based on critical thinking processes in the daily conversational utterances was investigated in this study. This study is consisted of two experiments, and inspected the hypothesis that explains the occurrence process of the statements as critique in the daily conversations. The process is consisted the cognitive events that are critical thinking attitudes, monitoring, avoidance from risk, and fluctuation of risk.

The first experiment was aimed to make the material text for second experiment. The material used in this study is the text of conversation that simulated the daily conversations. The topic was selected from five to two in the first experiment. The topics were differentiated in terms of the interpersonal communication and the socioeconomics.

The second experiment was aimed to investigate the relationship between the sympathy for speaker and the behavior as the results that subjects have read the text. Three versions of texts were made for second experiment: sympatric story, rational story, assertive story. As the result of the second experiment, those instances became clear. In the condition of sympatric text, most participants selected not critical statements. In rational text, most participants also selected not critical statements. In assertive text, the percentage of participants who selected critical statements and not critical statements was almost the same.

Key words: Critical thinking, Sympathy, Monitoring
キーワード：批判的思考，共感，モニタリング

はじめに

本研究では，会話における批判的発言選択に影響を及ぼす要因を検討する。なお，本研究における批判的発言とは，過度の一般化を指摘する発言を指す。

我々は，会話状況において，思い浮かんだ発言内容をそのまま発言したり，差し控えたりする。このうち，発言を差し控える行動は，発言抑制行動（畑中，2003，2006）と呼ばれている。発言抑制や発言行動に至る意思決定過程を検討した研究として，畑中（2003，2006）や田中（2005）が挙げられる。畑中（2003, 2006）は，発言抑制に至る意思決定に適切性判断，否定的思考，スキル欠如が，相互関連的に影響を及ぼすことを明らかにした。しかし，それらの生起順序の検討は検討されていない。田中（2005）は，３名の会話場面における被験者の発言に関する多肢選択課題を開発し，批判

Table 1　発言までの過程の仮説的モデル（本研究による）

会話への参入		
発言内容の想起	過度の一般化の指摘	批判的思考態度
会話の目的の認識	楽しい雰囲気にしなければ 正しい判断をした方がいいのでは	モニタリング
他者の反応の推測	発言によって場がしらけないか	リスク回避
発言の使用判断	同様の経験の回想	リスク変動
発言		

的発言と会話の目的との関係について検討した。その結果，目的が楽しむことである場合，発言選択率は低く，過度の一般化の指摘が目的である場合，批判的発言選択率は高かった。すなわち，批判的発言選択に会話の文脈の認識が関係することが示された。このような，文脈を的確に把握し適切な行動を選択する過程はモニタリング（e.g. Halpern, 1989, 1998）である。田中（2005）の手続きでは，発言選択に至る内的過程に関して測定していなかったため，選択されなかった場合でも，批判的発言が想起されていた可能性については否定できない。これに関しては，想起した批判的発言に他者の共感が得られないと予測した結果，リスク回避のために批判的発言選択が抑制された考察している。以上のように，想起された批判的発言の使用，抑制にはモニタリングやリスク認知が影響を及ぼすと考えられる。

畑中（2003・2006）や田中（2005）の知見からは，想起した発言内容の発言に対する他者の反応がコミュニケーションにおけるリスクとなり，リスク回避のために発言抑制行動が表出するという発言に至るまでのモデルを仮定することができる。本研究の目的のひとつは，このモデルを検証することである。

本研究のもうひとつの目的は，批判的発言を促す要因の検討である。本研究で仮定するモデルに基づくと，想起した発言に対するリスクを低減することができれば，楽しむ目的においてリスクの高い批判的発言を促すことができると考えられる。本研究では，発言に対する他者からの共感（承認）あるいは非共感（拒否）が発言に対するリスクを変動させると仮定する。

なお，批判的発言選択に影響を及ぼす要因としてのリスク認知には，対人不安や否定的思考（畑中，2003, 2006）などの対人コミュニケーションに関わるものだけでなく，金銭的被害や社会的迷惑等の社会経済的要因に基づくものも考えられる。本研究では，リスク認知の及ぶ範囲を，「会話によって場がしらけないか」あるいは「楽しい雰囲気にしなければ」などの対人コミュニケーションに関するリスクに限定して検討する。

予備調査

目　的

予備調査の目的は，実験で用いる材料文を作成することであった。本研究では，田中（2005）の発言選択課題において用いられた会話場面に加え，実験者が話題を新たに作成した。その理由は，本研究では，会話における発話者の発言に対する社会経済的責任に対するリスクをできるだけ低く設定したかったことによるものである。

方　法

被験者　大学生32名を被験者とした。

材　料　田中（2005）の発言選択課題で用いられた話題に，改稿を加えたものを材料文として用いた。また，本研究では，会話におけるリスク判断において，社会的および経済的なリスクを除いて検討したかったため，田中（2005）に加えて，本研究用に話題を追加して予備調査を行った。具体的には，田中（2005）の発言選択課題を改変し用いた。本課題は，A，B，Cの３名の登場人物による会話場面により構成されており，被験者は，Cになったつもりで読むことが求められた。２つの話題の会話場面が設定されており，１つめの話題におけるCの発言に対する共感度と，２つめの話題に対する被験者の発言選択が測定された。

手続き　予備調査では，下記のａからｅの５つの話題に関する会話文を冊子に綴じ被験者に提示した。話題ａは，10万円の英会話教材の購入に関するものであった。話題ｂは，テレビの占いを信じるかどうかに関するものであった。話題ｃは，血液型占いを信じるかどうかに関するものであった。話題ｄは，幽霊に関するものであった。話題ｅは，雑誌の広告欄で紹介されているダイエット食品の購入に関するものであった。以上の５つの話題を，１ページにつきひとつずつ掲載した。

Table 2　予備調査での各話題における批判的発言選択の有無

		話題				
		a	b	c	d	e
批判的発言	あり	6	20	22	17	7
	なし	26	12	10	15	25

被験者は，それぞれのペースで冊子を読み，各話題において設定されている設問に対して回答した。設問内容は，下記の通りである。

問１ 「あなたがＣであれば，どのような回答をしますか。次の４つから選択してください。」

問２ 「なぜ，その回答を選択しましたか」

問３ ５つの話題が掲載された次のページにおいて，設問３として，話題における主人公の発言が登場人物に対して及ぼす社会経済的責任について尋ねた。質問内容は，「あなたが読んだ５つの話題の中で，Ｃの発言に最も社会的および経済的な責任があると思うのはどの話題ですか。責任が大きいと考える順に，ａからｅの記号でお答えください。」

従属変数 本論文では，問１と問３の回答を分析の対象とした。

結 果

問１に対する回答 問１の発言選択に関する回答を批判的発言の有無に分け，各話題における批判的発言選択の有無の度数を Table 2に示した。Table 2を見ると，話題ａと話題ｅにおいて，批判的発言の選択数が，話題ｂ，ｃ，ｄよりも少ないことがわかる。

問３に対する回答 問３においては，発話者の発言選択場面における発言が他の話者に与える社会経済的責任について尋ねた。設問においては，被験者に，発言に対する社会経済的責任が大きいと考える順番について回答を求めた。各被験者の回答について，１位を５点，２位を４点，３位を３点，４位を２点，５位を１点とし，ａからｅの話題それぞれについて，被験者の回答を合計し平均値を算出した。各話題における順位得点について，１要因分散分析を行った。その結果，話題要因の主効果が見られた。($F(31, 4) = 56.13$, $p<.01$)

考 察

予備調査では，実験で用いる材料文の作成が目的であった。予備調査においては，田中（2005）の発言選択課題に加え，実験者が話題を新たに作成した。すなわち，合計５つの話題に関して，被験者の発言選択における批判的発言の有無が測定された。また，本研究では，発言選択課題において，発話者の発言選択についてできるだけ社会経済的なリスクが生じないものを作成するために，発言選択とともに，発言が他者に及ぼす社会経済的責任についても回答を求め順位得点を算出した。

発言選択の分析結果から，まず，話題ａと話題ｅにおける批判的発言の選択数が，話題ｂ，ｃ，ｄよりも有意に低いことが明らかとなった。次に，順位得点の分析結果からは，話題ａと話題ｅの得点が，話題ｂ，ｃ，ｄよりも有意に高いことが明らかとなった。すなわち，話題ａと話題ｅは，話題ｂ，ｃ，ｄよりも批判的発言の選択を促進するものではなく，かつ，発話者の発言の他者に対する社会経済的責任が高いことを示している。以上の結果は，話題ａ，話題ｅの批判的発言選択数の低さは，話題ａ，話題ｅの発話者の発言は，他の話題よりも他者に対する社会経済的責任が大きいことに起因すると解釈できる。また，話題ｂと話題ｃには，得られた結果には違いは見られなかったが，話題ｂは，先行研究の田中（2005）において用いられているため，本研究で用いるにあたっての適切性が追認されたと考えられる。そこで，実験においては，話題ｂ「テレビの占いを信じるかどうかに関するもの」と，話題ｄ「幽霊に関するもの」を用いることとした。

実 験

目 的

本実験の目的は，次の仮説を検討することであった。すなわち，自身が共感できる批判的発言であっても，他者からの共感が得られない場合は，会話場面において選択されることが少なく，他者からの共感を得られた場合批判的発言が多く選択されるというものである。この仮説を検証するために，本研究では，2つの話題に関する会話から構成される３種類の文章を作成した。１つめは，他者からの共感を得られる非批判的発言が選択された文章を読む条件（以下「共感重視条件」）であった。２つめは，他者からの共感が得られない批判的発言が選択された文章を読む条件（以下「論理性重視条件」）であった。３つめは，他者からの共感が得られた批判的発言が選択された文章を読む条件（以下「他者理解条件」）であった。これら３条件において，結果は次のように予測される。

まず，共感重視条件においては，１つめの話題における発言に対する被験者の共感度は低く，２つめの話題においては批判的発言を選択する割合は低い（予測１）。次に，論理性重視条件においては，１つめの話題における発言に対する被験者の共感度は高いが，それにより他者から共感を得られないために，２つめの話題においては批判的発言を選択する割合は低い（予測２）。これに対して，他者理解条件においては，１つめの話題における発言に対する被験者の共感度は高く，これに対して他者から共感を得られることにより，２つめの話題おいて批判的発言を選択する割合が高くなる（予測３）。

方　法

調査対象者　大学生326名が調査対象者であった。

材　料

１．発言選択課題　予備調査によって選定した話題を用いて，発言選択課題を作成した。本課題は，A，B，Cの３名の登場人物による会話場面により構成されており，被験者は，Cになったつもりで読むことが求められた。２つの話題の会話場面が設定されており，１つめの話題におけるCの発言に対する共感度と，２つめの話題に対する被験者の発言選択が測定された。本研究では，３名の会話の構成の違いにより「共感重視文」「論理性重視文」「他者理解文」の３バージョンを作成した。

「共感重視文」とは，１つめの話題に対して，Cが盛り上げる発言をして，他の登場人物の共感を得るという内容であった。次に「論理性重視文」とは，共感重視文とは逆に，Cが１つめの話題の科学的妥当性の低さを指摘し，他の登場人物を落胆させる内容であった。そして「他者理解文」とは，論理性重視文と同様にCが１つめの話題の科学的妥当性の低さを指摘するが，その発言に対して他の登場人物が納得するという内容であった。

課題遂行においては，被験者は，３つの文章のうちどれか１つを読んだ。各条件文を巻末資料として示した。

２．批判的思考態度尺度（平山・楠見，2004）　本研究では，批判的発言選択に影響を及ぼす要因として，発言者の批判的態度を検討した。本研究では，批判的思考態度を測定するために，批判的思考態度尺度を用いた。

３．セルフ・モニタリング尺度（岩淵・田中・中里，1982）　会話場面における発言選択は，社会的状況における個人の行動であると位置づけることが出来る。このような，社会的状況における反応の個人差を説明する過程としては，セルフ・モニタリングを挙げることができる。本研究では，セルフ・モニタリングと批判的思考態度および批判的発言選択の関係を検討するために，セルフ・モニタリング尺度（岩淵・田中・中里，1982）を用いた。

以上の３種類の材料が，１，２，３の順番で冊子として綴じられ，調査において用いられた。なお，本論文においては，１の発言選択課題の結果のみを，以下の分析の対象としている。

手続き　本実験は集団で実施された。まず，調査用紙の冊子が配布され，冊子表紙の教示に従って回答するよう求められた。

従属変数　本研究では，発言選択課題における，Cの発言に対する共感度と２つめの話題に対する発言選択，批判的思考態度尺度とセルフ・モニタリング尺度の回答を従属変数とした。

結　果

発言選択の分類　本研究で用いた発言選択課題では，発言に関して４つの選択肢を設定し，同調的発言と批判的発言に分類した。具体的には，架空のテレビ番組における正座占いの結果について３名で話し合っている場面において，「わたしも明日見てみようかな」「もしかしたらAさんにも運命の出会いがあるかも」と，他の人間に同調する発言と，「あの番組の占いが必ず当たるとは言い切れない」「２人の結果だけで判断していいのか」と，判断に関する過度の一般化を指摘する批判的発言の２つに分類した。

操作チェック　本研究では，発言選択課題に，「共感重視文」「論理性重視文」「他者理解文」の３つのバージョンを作成した。発言選択課題における１つめの話題に対して，共感重視文では，「あなたにも見えるかもしれない」と，Cは他の２人に共感を示す発言をしている。一方，論理性重視文と他者理解文では，「あの雑誌で紹介してたからって必ず見えるとは限らない」と，Cは過度の一般化について冷静に判断することを促す発言をしている。課題文読解時に，被験者が課題文章の内容を作成意図どおりに理解できているかを確認するために，１つめの話題に対するCの発言意図に関する判断を求めた。具体的には，問１として，「１．物事を冷静に判断することが重要だ」「２．会話の雰囲気を楽しいものにしたい」「３．特に意図はない」という３つの選択肢を設定した。共感重視文を読んだ被験者のうち，１と３を回答した12名（９％）は分析の対象外とした。同様に，論理性重視文および他者理解文を読んだ被験者のうち，２と３を回答した14名（15％）は分析の対象外とした。

登場人物の発言に対する共感度　問２において，１つめの話題におけるCの発言に対する共感度を測定した。１つめの話題に対するCの発言は，課題文の種類によって異なる。具体的には，共感重視文では他者に対する協調的な発言であり，論理性重視文および他者理解文では，論理性を重視した発言であった。各条件において，それぞれCの発言に対してどれくらい共感できるかに関して，５段階での判断を求めた。Table 3，Table 4，Table 5に，各条件における１つめの話題におけるCの発言に対する共感度の有無と批判的発言選択の有無を示した。Table 3，4，5に実験１の各条件における話題１でのCの発言に対する共感と話題２の批判的発言選択の有無を示した。χ二乗検定の結果，共感重視条件では（$\chi^2(1)=9.29$, $p<.05$），論理性重視条

件では（$\chi^2(1)=16.3$, $p<.05$）と有意であった。他者理解条件では（$\chi^2(1)=0.191$, n.s.）と有意ではなかった。

考　察

本実験の目的は，自身が共感できる批判的発言であっても，他者からの共感が得られない場合は，会話場面において選択されることが少なく，他者からの共感を得られた場合批判的発言が多く選択される，という仮説を検証することであった。以下，実験１の予測が確認されたかどうかを確認し，結果を考察する。

まず，予測１について確認する。Table 3に示されているように，共感重視条件では，１つめの発言に対する被験者の共感度は低く，２つめの発言において批判的発言が選択される割合は低かった。すなわち，予測1は全面的に支持されたといえる。次に，予測２について確認する。Table 4に示されているように，論理性重視条件においては，１つめの発言に対する被験者の共感度は高かったが，２つめの発言においては批判的発言が選択される割合は低かった。すなわち，予測２も全面的に支持されたといえる。最後に，予測３について確認する。Table 5に示されているように，他者理解条件では，１つめの発言に対する被験者の共感度は高かった。また，２つめの話題においては，他の２条件よりも批判的発言が多く選択された。しかしながら，χ^2乗検定の結果は有意ではなく，非批判的発言も多く選択された。すなわち，予測３は完全には支持されなかった。予測３が完全に支持されなかった原因について考察する。

Table 3　実験１共感重視条件における話題１のCの発言に対する共感と批判的発言の有無

共感重視条件

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	12	13
	なし	16	72

Table 4　実験１論理性重視条件における話題１のCの発言に対する共感と批判的発言の有無

論理性重視条件

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	10	65
	なし	14	13

Table 5　実験１他者理解条件における話題１のCの発言に対する共感と批判的発言の有無

他者理解重視条件

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	32	35
	なし	12	16

まず，１つめの話題における批判的発言に対する共感度は，共感重視条件では低く，論理性重視条件と他者理解条件では高かった。このことは，日常的な会話場面において，過度の一般化を促す発言にはあまり共感できないことを示している。また，論理性重視条件において，被験者が共感する割合の高い批判的発言に対して他者からの共感が得られない場合，同様の場面においては批判的発言の選択率が低いことが示された。以上の結果は，日常的話題において，過度の一般化を促す発言に対して共感できないながらも，他者の理解が得られない場合には，批判的発言を選択しない傾向にあることを示唆するものである。

しかしながら，他者理解条件において，１つめの発言に対して他者が理解を示しているにもかかわらず，２つめの話題における発言選択でも約半数の被験者が非批判的な発言を選択することが示されている。他者の共感を含む円滑なコミュニケーションが求められる日常的会話場面においては，当該の会話に楽しくすべきであるという目的の認識が批判的発言の選択率を低くしているという先行研究に基づき，本実験では，批判的発言に対する他者から共感が批判的発言の選択率を向上させるという予測を立てた（予測３）。実験の結果，他者共感条件における批判的発言選択率は，共感重視条件および論理性重視条件よりも高いものであったが，非批判的発言選択と批判的発言選択の選択率に有意差は見られなかった。本実験の結果は，日常的会話場面における他者の共感が，過度の一貫性を指摘する批判的発言を促すことを示すものであるが，他者の共感が得られた場合でも批判的発言を選択しない割合が同程度であることを示すものであった。このことは，日常的会話場面での批判的発言選択を促す，自身の発言に対する他者の共感以外の要因の影響を示唆するものと考えられる。

以上のように，本研究では，発言選択課題を用いた発言に対する共感度と批判的発言選択の関係の検討では，１つめの話題に対するCの批判的発言に対して共感が得られたにもかかわらず，約半数の被験者は２つめの話題に対して批判的発言を選択しないという結果が得られている。実験前は，事前にリスクが高いと見積もられている批判的発言に対して，リスクを低減させるような共感的反応が得られた場合，当該の会話場面における批判的発言に対するリスクが低減すること

により，同様の場面における批判的発言の選択率は論理性重視条件に比べて増加するのではないかと予測を立てた。結果は，他者理解条件における批判的発言の選択率は論理性重視条件よりも高いものであったが，他者理解条件においては，批判的発言の有無で発言選択率に有意な違いは見られなかった。本実験の結果は，批判的発言選択には，批判的発言選択に影響を及ぼす要因として，他者による反応とは別の要因があることを示唆するものである。批判的発言選択に至る過程を明らかにするためには，今後は，批判的発言選択に影響を及ぼす他者反応とは別の要因に関する詳細を明らかにする必要があるだろう。

なお，本実験では，１つめの話題において共感度の判断を求めた際に，あわせてその発話意図に関する判断も求めている。その際，会話の意図を正しく認識していない被験者の回答は分析から除外している。このことから，楽しむこと，あるいは，過度の一般化を指摘すること，という発話の目的の認識のばらつきが，他者理解条件における発言選択の分離傾向に影響を及ぼした可能性については排除することができる。本実験において，論理性重視条件と他者理解条件の刺激文章の違いは，１つめの話題における発言後，他者から受ける反応の違いのみである。すなわち，他者理解条件における発言選択の分離傾向に影響を及ぼす要因として，発言後に他者から受けた反応に対する被験者の認識の個人差を挙げることができる。

今後は，以上のような課題に基づき，実験計画を修正し，批判的発言の生起過程についてさらに詳細に検討を行う必要があるだろう。

【引用文献】

Halpern, D. F. 1989 *Thought and knowledge: An investigation to critical thinking* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Halpern, D. F. 1998 Teaching critical thinking for transfer across domains: Dispositions, skills, structure training, and metacognitiove monitoring. *American Psychologist*, **53**, 449-455.

畑中美穂　2006　発言抑制行動に至る意思決定過程：発言抑制行動決定時の意識内容に基づく検討　社会心理学研究，**21**，187-200.

畑中美穂　2003　会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響　心理学研究，**74**，95-103.

平山るみ・楠見孝　2004　批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響－証拠評価と結論生成課題を用いての検討－　教育心理学研究，**52**，186-198.

岩淵千明・田中國夫・中里浩明　1982　セルフ・モニタリング尺度に関する研究　心理学研究，**53**，54-57.

田中優子　2005　批判的思考の使用に及ぼす目標と文脈の効果　京都大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）.

Appendix　実験で用いた発言選択課題の概要

話題１

Ｃは，授業が終わって，友達のＡ，Ｂと教室から出てきた。

Ａ「あの道，雨が降った日の夜通ると幽霊が見えるって雑誌に紹介されてたんだ。私は幽霊とか大好きなんだけど，今週は雨が続きそうだから，私にも幽霊が見えるかな。」

Ｂ「あの雑誌が紹介する別の心霊スポットに行った私の友達も，幽霊を見たって言ってたよ。Ａさんにも幽霊が見えるかも。」

〈共感重視〉

Ｃ「もしかしたらＡさんにも見えるかもね。」

〈論理性重視〉，〈他者理解〉

Ｃ「雑誌で紹介してたからって必ず見えるとは限らない。」

問１　文脈認識の確認

問２　共感度を５段階で評定

他者反応

〈共感重視〉　→その場はとても盛り上がりました。

〈論理性重視〉　→Ａさん，Ｂさんは押し黙ってしまいました。

〈他者理解〉　→Ａさん，Ｂさんは，Ｃの発言に納得しました。

話題２

テレビのラッキー占いが話題。発話の構造は話題１と同じ。

問３　あなたがＣであれば，どのような発言をしますか。最も当てはまる数字を１つ○で囲んでください。

１．あの番組の占いが必ず当たるとは言い切れないよね

２．私も明日見てみようかな

３．もしかしたらＡさんにも運命の出会いがあるかもよ

４．２人の結果だけで判断していいのかな